様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１８４７６

研究課題名（和文）明治大正期の美術界と建築界の相互交渉に関する新知見と歴史記述転換の追究

研究課題名（英文）Pursuing new knowledge and a change in the historigraphy concerning mutual exchanges between the worlds of art and architecture in the Meiji and Taisho periods.

研究代表者
今橋　映子（IMAHASHI, Eiko）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：２０２５０９９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、従来日本近代美術史と日本近代建築史を統合して、全く新しい近代芸術史を記述しようとする試みである。3年間の研究は順調に推移し、その成果を刊行本の一章として公刊することができた。今橋映子（単著）『近代日本の美術思想――美術批評家・岩村透とその時代』（白水社、2021年5月刊行）は上・下巻で1504頁（120万文字）に及ぶ大著であるが、その第16章（下巻所収）が「美術と建築、技芸家と社会」と題する本科研費の成果である。ここでは、明治大正期に活躍した美術批評家・岩村透を中心に据え、いかに建築界と美術界が人脈的にも、思想的にも近接していたのかを、未知の具体的事例から描き尽くした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで明治大正期の芸術史を構築する際に、建築領域を念頭に置き、それを大きな社会的潮流の中で記述する試みはほとんど無かったと言って良い。本研究は明治大正期の建築界と美術界との人的交流や共同制作、相互批評や文化行政的共闘の有様を初めて具体的に明らかにした。それによって美術家や建築家の地位がまだ定まらない時代に、彼らが、一般市民の美的教養や住まいのあり方から、都市の美的環境に至るまで、私たち現代人にとっても大変重要な課題を、真摯に改善しようと努力した様相が浮かび上がってきた。人間の美的環境の改善には、百年後を見据えた指針が常に必要であるということが再確認された研究でもある。

研究成果の概要（英文）：This research is an attempt to integrate the conventional histories of modern art and modern architecture in Japan and present an entirely new modern history of the arts. The research has proceeded smoothly over a three-year period, and the results have been published as one chapter in a book. Kindai Nihon no bijutsu shiso - Bijutsu hihyoka Iwamura Toru to sono jidai (Art thought in modern Japan- the art critic Iwamura Toru and his times) (Hakusuisha, May, 2021), of which Imahashi Eiko is the sole author, is a large work, 1,504 pages (1.2 million characters) in two volumes. "Art and Architecture, the Artist and Society," its sixteenth chapter (volume 2), presents the results of the research to which this research funding was applied. Focusing on Iwamura Toru, an art critic active in the Meiji and Taisho periods, it lays out in detail, using hitherto unknown specific examples, how the worlds of art and architecture drew close to each other in terms of both personal networks and thought.

研究分野：比較文学・比較文化

キーワード：近代日本美術　近代日本建築　美術批評　建築批評　岩村透　黒田鵬心　中條精一郎　建築と美術

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

人文研究においてこれまで、絵画、彫刻、工芸などの各分野については膨大な研究が積み重ねられており、さらに「絵画と文学」「絵画と工芸（装飾美術）」などのクロスジャンル（比較芸術）研究も豊かな成果を上げてきた。しかし、大学や大学院における芸術研究や芸術教育が、文学部（文学、芸術諸学）と工学部（建築史、意匠）とに分かれている現状からか、とりわけ申請者を含む文学部出身の研究者にとって、芸術史を構築する際に、建築領域を念頭に置くことは少ない。

しかし申請者は近年、とりわけ明治大正期において、建築界と美術界が緊密な連携を保ち、共同制作をし、同一組織に属して政府に働きかけをし、同一の思想の具現化を試みていたことに気づいた。例えば作家・森鷗外と画家・黒田清輝が、建築家・中條精一郎と同一組織で何をめざしたのかを知る人は、（芸術研究でも建築史研究でも）今日ほとんど皆無と言って良いだろう。

２．研究の目的

本研究は、従来日本近代美術史と日本近代建築史を統合して、全く新しい近代芸術史を記述しようとする試みである。

明治大正期の美術家と建築家彼らの活動は、個人の美的創作の域を大きく超えて、「創作家」の尊厳の法的・社会的確立や、近代住宅や〈家族〉のあり方、さらには都市の文化景観の保全の問題に至るまで、実に多様で大局的な内容を含むものだった。これを総体的に記述することができれば、日本近代社会において諸芸術や建築が、いかなる役割を果たしていたのか、それをはじめて知ることになるだろう。本研究はその意味で歴史記述の転換の試みであると同時に、美術–建築–文学–文化行政–アーツマネジメントなど、諸分野に専門分化している学術大系を、いかに統合できるかについての初めての試みとなる。多分野の専門家の共同研究ではなく、あえて個人研究でこの統合を為そうとすること自体が、挑戦的研究と考えた次第である。

３．研究の方法

（1）　研究方法の概略

○本研究は、一次資料の精緻な文献学的分析によって成立するものであるので、3 年間の研究期間を希望する。各年度の推移は以下の通りである。

○本研究は、人文諸学の通例に則り、主に文献研究の方法を採用する。その上で諸学の規律や規範に囚われず、明治大正期の都市と文化を総体的に記述することに、その革新性がある。

（2）　研究方法の各論 (年度順)

【2018 年度=組織研究】

1「国民美術協会」:現在では美術史でもほとんど忘却され、建築史で 1 本の論文を数えるのみだが、森鴎外、黒田清輝、岩村透、中條精一郎、塚本靖など数十名の画家、工芸家、装飾美術家、建築家、報道関係者などが集合したこの協会は、今日に至るまで例をみないユ ニークな組織であり、文部省や政府などとの直接交渉を行って、美術行政や都市計画、制作家の権利問題などを扱った。その実態を初めて明らかにする。

2「吾楽会」:国民美術協会の源流と申請者が推測するのが、吾楽会である。東京美術学校の教員と外部制作家たち(絵画、工芸、彫刻、建築)の、いわばプロ集団であり、相互批評と作品研究会、展覧会の開催によって、質の向上に努めた。その実態を初めて明らかにする。

【2019 年度=建築物および雑誌研究】

1 明治大正期の美術界と建築界の共同創作の最適な例を、慶応大学図書館および東京府美術館だと目しており、当時の建築資料や学校史料などを活用して実態を解明する。

2 雑誌『美術新報』『美術週報』『国民美術』『建築雑誌』『建築工芸叢誌』『建築ト装飾』など、関連する膨大な一次資料から、画家、美術批評家、作家、建築家たちの言説を洗い出す。これはかなり時間のかかる作業となるが、革新的結果が期待できる。

【2020 年度=建築と美術を結ぶ思想】

1 社会における建築、工芸、美術の緊密な連携の重要性を主張したのはイギリスのラスキン、モリスであり、日本はその影響を色濃く受けている。イギリスでの現地調査を踏まえ、従来とは全く異なり「初期社会主義」の思想から日本との関係を比較文化論の手法であぶりだ

す。
2「都市の美観」問題:今日的用語では「都市の文化的景観」の問題であり、これに美術家と建築家双方が関わっている点を、歴史的に初めて明らかにする。
3 美術家と建築家の、職能人としての尊厳の問題を社会思想史として扱い、上記に結節する。

４．研究成果

３年間の研究は順調に推移し、その成果を刊行本の一章として公刊することができた。今橋映子（単著）『近代日本の美術思想――美術批評家・岩村透とその時代』（白水社、2021 年 5 月刊行）は上・下巻で 1504 頁（120 万文字）に及ぶ大著であるが、その第 16 章（下巻所収）が「美術と建築、技芸家と社会」と題する本科研費の成果である。ここでは、明治大正期に活躍した美術批評家・岩村透を中心に据え、いかに建築界と美術界が人脈的にも、思想的にも近接していたのかを、未知の具体的事例から描き尽くした。文字数は約 12000 文字（400 字詰め原稿用紙換算 300 枚）に上り、単体の本としても刊行できる規模の叙述が出来たと考える。本書第 16 章の目次は以下の通りである。

第 16 章　　美術と建築、技芸家と社会
－１　岩村の「造家」趣味
　　趣味の精髄／美校教授の御宅拝見―下渋谷村伊達跡／
　　真の美術的住家建築―本郷龍岡町と三浦三崎
－２　岩村透の建築論とその土壌
　　建築関係蔵書を見渡して／イタリア建築史の紹介／実弟・建築家　竹腰健造／
　　〈美術建築〉家・大澤三之助
－３　渋谷伊達跡の住人たち――山賊会の感興
　　渋谷村という郊外／山賊会の感興
－４　吾楽会の時代――小芸術と〈美術建築〉の夢
　　『美術新報』改革の精神と〈小芸術〉／吾楽会のメンバーと理念／
　　〈美術建築〉としての吾楽殿と日本建築の様式論争
－５　明治大正期建築界のおける「芸術派」の再規定
　　明治大正建築史における 1910 年代／〈辰野金吾・松岡壽〉の系譜／
　　明治大正期「芸術派」の再規定
　　(1)緊密な人間関係―パンテオン会から吾楽会へ
　　(2)装飾から環境まで―建築において「意匠」とは何か
　　(3)古典と現代の架け橋―
　　①『文様集成』　②『建築工藝叢誌』
　　③エジプト熱の時代―『建築ト装飾』展
　　(4)協働の場―有楽座と慶應義塾図書館を中心として
－６　建築論と美術ジャーナリズムの接近
　　『美術新報』ふたたび／賞美章・岡田信一郎「大阪市公会堂設計図」／
　　建築評論家・黒田鵬心の立ち位置
－７　建築界と美術界の紐帯――国民美術協会建築部の意義
　　建築部メンバーの概要／森井健介の回想から／建築と国民
－８「意匠」としての都市――都市の美観と都市社会主義の交差
　　都市社会主義における「都市の修飾」と岩村＝坂井／
　　「都市の美観」論の推移―国民美術協会設立まで／
　　国民美術協会と「都市の美観」―旧工部学校遺構の保存活用運動／
　　新しい世代へ―帝都復興創案展覧会
－９　建築家の職能と社会
　　建築士法制定運動の意味／中條精一郎―岩村透を継ぐ者

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 今橋映子	４．巻 第２３号
２．論文標題 「明治大正期日本のアートドキュメンテーション――美術批評家・岩村透による国内外美術情報の構築とその思想（下）」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『超域文化科学紀要』	６．最初と最後の頁 142-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今橋映子	４．巻 第６号
２．論文標題 「カタログアーカイブの形成と展覧会批評の磁場―東京大学駒場博物館資料室の軌跡と学術教育活動の実践―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『Ｆａｓｈｉｏｎ　Ｔａｌｋｓ…』［服飾研究］	６．最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 今橋映子	４．発行年 2021年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 716頁
３．書名 『近代日本の美術思想――美術批評家・岩村透とその時代』上巻	

１．著者名 今橋映子	４．発行年 2021年
２．出版社 白水社	５．総ページ数 788頁
３．書名 『近代日本の美術思想――美術批評家・岩村透とその時代』下巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関